

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

Una vacanza sabbatica ⑪

モーツァルトを聴く葡萄

緋月 まや

「そのワイン、モーツァルトを聴いた葡萄からできているんですよ」

壁一面の棚にボトルが敷き詰められていた。そこから一本を抜き出して、その謎めいたラベルをしげしげと見つめていると、上方から声がした。見上げると、はしごに登って棚の整理をしていた店員さんと目が合った。

「えっ？ もう一度、言ってください」と聞き返してみたが、やはりそう言っているようにしか聴こえない。私の脳裏で「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」の格調高く軽やかな旋律が流れ出した。モーツァルトを聴くと頭がよくなるとか、胎教にいいとか、そういった類の話なら聞いたことがある。けれど、そのメロディーは、植物である葡萄にも影響を及ぼすものだったのか？ モーツァルトを聴いて育った葡萄は、一体どんな風味のワインになるのだろうか？

モーツァルトのワインと出遭ったのは、モンタルチーノという小さなまちだ。その絶景が世界遺産にも登録されているオルチャ峡谷の中にある。フィレンツェから南へ向かうバスを二本乗り継いでたどり着いた。中世の面影を残す石造りのまちの美しさに見惚れながら、私は丘の上にある要塞を目指していた。七百年前、近隣の都市国家間で領土争いが絶えなかった時代に築かれた歴史的建

造物であり、現在はエノテカとして活躍していると聞いていたからだ。この小さなまちは、トスカナ州が誇る偉大な赤ワイン「ブルネッロ」の銘醸地なのである。どこか懐かしいアコーディオンの音色が聞こえてきた。音の方に向かうと、小さな広場で、農民風の時代衣装に身を包んだ若者たちがフォークダンスを踊っていた。



【ツグミ祭りでダンスを踊る住民】

イタリアでは秋になると、各地で収穫祭が開かれる。ちょうど五年前、十月最後の週末のこの日、モンタルチーノは「ツグミ祭り(Sagra del Tordo)」で賑わっていた。何世紀も昔、秋になって丘の上にツグミをはじめとする渡り鳥がやってくると、それを狩って調理し、豊穣の秋を祝ったことに起源を持つ。坂道を登っていくと、屋台が数件並んで

いた。近づいてみると、串刺しにされた鳥の丸焼きが列をなしている。大きすぎて、私には丸一羽はとても食べられない。揚げたてのポルチーニ茸をおつまみに、夢にまで見た本場のブルネッコを一杯いただいた。青空を背に、目の前にはもう、茶褐色の監視塔と外壁が高くそびえていた。



【モンタルチーノの要塞(上)、要塞の中にはエノテカ(下)】

要塞の中に入った。重厚な壁の内側はテラスのようになっていて、ワインを楽しむ人々の姿があった。さらに奥に進むと、広々とした一室に、フィレンツェでは見たこともない本数のブルネッコが陳列されていた。ある一枚のラベルに目が引きつけられた。黒地に金色の五線譜が描かれ、その上で六つの音符が葡萄の房を形作っている。不思議に思って眺めていると、「それはモーツァルトを聴いて育った葡萄のワインなのだ」と、天から声が響いてきた次第である。

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトは1756年、現在のオーストリアで生まれた。五歳で作曲を始め、わずか三十五年の人生で六百曲以上もの作品を残し、そのほとんどが佳曲であるとされる。あまたの天才がひしめく音楽家の中でも異次元の天才である。楽譜には下書きや推敲の跡はほぼ見られなかったとの伝説もある。一方で、

優美な作風とは逆に、人間としては下品な言動や奇行癖が有名で、その死に到っては毒殺説まであった。映画『アマデウス』(1984年製作)で、その才能に嫉妬したイタリア人作曲家サリエリの独白を通して描かれている通りである。そんな謎に満ちた生涯の中で、ひとつははっきりしていることがある。それは、モーツァルトがフランス革命前の旧体制を生き延びた作曲家だということだ。宮廷音楽家としてキャリアをスタートし、死没した1791年、全欧に衝撃を与えたこの革命はまだ序章を迎えただけに過ぎず、モーツァルトは支配層であった貴族たちの夥しい命が断頭台の露と消えていくのを見ていない。モーツァルトの作品には圧倒的に長調が多く、明るく華やかで、力強い。自分たちの特権は永久に続くと思われて疑わなかった貴族社会の楽観性を映し出しているかのようだ。モーツァルトと並び称されるもう一人の天才ベートーヴェンが革命後を生きて、短調に惹かれ、その曲調が民衆の苦悩を代弁していると評されるのと対照的だ。

そんなモーツァルトの名前を冠するこのワインは、「イル・パラディーゾ・ディ・フラッシーナ」というワイナリーでつくられている。創始者のジャンカルロ・チニョッティさんは大の音楽好きで、かねてから農作物の音響栽培に興味があり、実際に自分の葡萄畑でモーツァルトを流してみることにした。弁護士からの転身で、もう二十年以上になる。畑には百個ものスピーカーが設置され、葡萄の木は二十四時間、クラシック音楽のシャワーを浴びる。モーツァルトだけではない。ベートーヴェンも、バッハも、マーラーも、チャイコフスキーもかけた。発芽期にはバロック音楽、成熟期には交響曲と、生育状態に合わせてジャンルも変えた。その結果、葡萄の生長が加速して果実が増え、寄生虫が寄りつかないなどの効果が表れたそうだ。特筆してモーツァルトにおいて顕著だったという。

ブルネッコは最低でも五年間、木樽などで熟成させた赤ワインだ。このため高価で、予算的に一本しか買えない。店内を見渡せば、趣味のいい木製のカウンターがあり、試飲もできるようになっていた。九種類をいただいた。フィレンツェで飲む機会の多いキアンティ・クラッシコに比べると、さらに力強い感じが共通していた。当然ではある。ブル

ネッロは、キアンティの主要葡萄品種であるサンジョベーゼの亜種「サンジョベーゼ・グロッソ」でつくられる。サンジョベーゼよりも粒が大きく、よりパワフルな味わいが楽しめる。どれもいいワインには違いなかったが決め手に欠いた。金色の五線譜のラベルがどうしても頭を離れない。結局、モーツァルトのワインを購入した。



【モーツァルトのワイン(中央)】

このラベルが物語る音響栽培の試みは、葡萄の木がモーツァルトに感動してすくすく育つというおとぎ話ではない。フィレンツェ大学やピサ大学と連携して行った研究に基づく、れっきとした科学だ。『植物は<知性>を持っている』(NHK 出版)の著者で、この実験に携わってきたフィレンツェ大学農学部のステファノ・マンクーゾ教授らによると、葡萄という植物は音を振動として知覚し、周波数を識別している。人間のような耳を持たない代わりに、体中に耳がついているようなものらしい。地上に出ている部分は空気を通して、地中に張った

根は土を通して、音波という形で振動を感知する。人間で言えば、クラブの大音量の中でお腹のあたりに強い振動を感じる、あの感覚だろうか。そんなふうに音楽を聴いて育った葡萄の木は、聴かずに育った木に比して、味、色、ポリフェノールの含有量において優れた果実を実らせたようだ。一定時間における振動数が多いほど、すなわち周波数が高いほど、音は高くなるのであるが、実験の結果、低周波が種子の発芽、根の伸長など植物の生長にいい影響を与え、高周波には生長を抑制する効果があったという。

年の瀬、モーツァルトのワインを開けた。熟成された赤ワインの特長である複雑で洗練された味わいはもちろんだが、モンタルチーノで試飲したどのブルネッロよりもさらに濃厚だったのが印象的だった。優美さと力強さが共存していた。私の脳裏に、再び「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」が流れ出した。モーツァルトの作風を思えば、いかにもその名にふさわしい一本だったのかもしれない。

「旅をしない音楽家は不幸だ」。モーツァルトは、そんな言葉を残している。人間の話す言葉にも周波数がある。英語やイタリア語は高い。日本語は低く、高周波数の言語の聴き取りが難しいとされる。日本人に外国語を苦手とする人が多いのはこのためだという説もある。モーツァルトは、その才能にいち早く気づいた父親の方針で、当時、音楽先進国だったイタリアをはじめ、幼少から外国で演奏旅行をする機会に恵まれた。こうして周波数の異なる言語に慣れ親しむうち、聴覚が驚異的に発達したと言われる。モーツァルトが稀代の天才である所以は、旅で培ったその聴力にあったのだろうか。周波数は目に見えない。そのため意識することもなく暮らしているけれど、植物にも、動物にも、人間にも、生きとし生けるものすべてに、思いもかけない影響を与えているのかもしれない。モンタルチーノのまちで、モーツァルトとその音楽を聴く葡萄に出遭い、私はなんだかちょっと肩の力が抜けたような優しい気分になった。

(ライター、イタリアソムリエ協会/
AIS 認定ソムリエ)

イタリアげんぱつ紀行 その3

トリノではなくてトリノに行く

二宮 大輔

六か月ぶりにイタリアを訪れた。もちろん原発を見に行くためだ。今回の目的地はピエモンテ州トリノ(Torino)とよく似た名前のトリノ(Trino)である。

これからトリノと連呼するので、まずはっきりさせておきたい。カタカナの表記は同じでも、Torino と Trino の発音は別物である。イタリア語の単語は概ね子音＋母音で構成されており、ローマ字読みができるので、日本語話者にとって発音しやすいなどと言われているが、実際には子音の連続も多く、これを上手に発音するのがかなり厄介だ。特に t と r の連続は「3」(tre)や「見つける」(trovare)や「横断する」(attraversare)など、日常会話でも非常によく用いられる。カタカナで表記するなら「トレ」「トロヴァーレ」「アットラヴェルサーレ」となるだろう。だが子音 t の発音は厳密には「ト」ではない。「ト」(to)と発音しようとして母音 o の手前で口の動きをストップさせる感じと言えればわかってもらえるだろうか。要はカタカナでは正確な表記ができない発音なのだ。

そもそも「ト」を含むカタカナが、いや日本語の表記自体が実際の発音を正確に伝えることができない曖昧さをはらんでいる。例えば、トリノ(Torino)だってミラノ(Milano)だって、本来ならば後ろから二番目の母音にアクセントがくるからトリーノ(Torino)、ミラーノ(Milano)と表記すべきだし、実際にそう表記されているケースも見受けられる。ところが俗にいう伸ばし棒「ー」を挿入するかしないかは、かなりいい加減に決められている。古い記事に元首相シルヴィオ・ベルルスコーニが「ベルルスコーニ」と表記されていたことを私は忘れはしない。さらに v の発音を含む名前のシルヴィオのほうも、「シルヴィオ」とするのか「シルビオ」とするのか。はたまた、作家 Pirandello の l

の二重子音は「ピランデッロ」とするのか、「ピランデルロ」とするのか。我々は明確な指針を持たないまま、なんとなく前例に倣って、異国の固有名詞をカタカナで表記している。

このやり方に無理が生じたのが、カタカナだと完全に同じ名前になってしまう Torino と Trino の事例だ。発音の問題はここで置くとして、今回の記事内ではトリノと表記される町の名前は、冬季オリンピックの開かれたピエモンテ州都の Torino ではなく、同じピエモンテ州にある小村 Trino であることを、事前に承知いただきたい。



【トリノ(Trino)の街角】

これから語るべきことがたくさんあるのに、盛大に脱線してしまった。トリノに行った時期に話を戻そう。2023年9月、私は六か月ぶりにイタリアを訪れた。まずはローマに一週間滞在し、そのあとトリノおよび北イタリアを回る予定だ。ローマに着いたのが9月4日で、折しもクリストファー・ノーラン監督の『オッペンハイマー』が映画館で上映されており、大変な話題になっていた。「原爆の父」として知られる物理学者ロバート・オッペンハイマーの伝記映画だ。マンハッタン計画のチームリーダーとして原爆開発に貢献した彼は、広島と長崎の

原爆投下後に日本が無条件降伏したことから、戦争終結の立役者としてアメリカ国内で称賛される。ところが彼自身は、原爆によって降伏間近の日本で多くの犠牲者が出たこと、そしてこれから各国が核兵器を争うように開発するだろうことを予見し、自らの所業に苦悩する。

広島と長崎に関する言及もあり、各方面への根回しに時間がかかっているのか、日本では 2023 年 10 月の時点で公開日がはっきり決まっていない。タイトルだけで推測するとデリケートな問題を扱っているようにも見えるかもしれないが、むしろその内容は、鑑賞者ひとりひとりがしっかりと原子力の問題に向き合うきっかけとなるような、意義深いものだった。

またすごいタイミングですごい映画を観てしまったと私は思った。私がこれから行くトリノの原発は、その名をエンリコ・フェルミ原子力発電所という。エンリコ・フェルミというのは、ノーベル賞を獲得したイタリアの物理学者で、マンハッタン計画にも参加しているのだ。

まず彼の生涯を簡単に振り返ると、1901 年ローマに生まれている。大学で物理学を学び、1926 年からローマ大学で教鞭をとる。原子核の放射性崩壊の理論「ベータ崩壊」を完成させ、1938 年にノーベル物理学賞を獲得。ちょうどイタリアがファシズム政権に支配されていた時期だったこともあり、妻がユダヤ人だったフェルミは、ストックホルムでのノーベル賞授賞式後、イタリアには帰らず、アメリカに移住し研究を続ける。オッペンハイマーとともにマンハッタン計画で中心的な役割を担い、その後もアメリカに留まり世界初の原子炉を完成させるなどの業績を残し、1954 年に亡くなっている。原発の開発にも大きく貢献したが、原子爆弾の後継である水素爆弾の開発に反対しており、その点においてはオッペンハイマーと意見を同じくしている。

彼らが優れた科学者だからこそ、人類の進歩の一助となる業績を成し遂げることができたわけだが、そこには世界をよからぬ方向に導いてしまう可能性も内包している。このような科学技術の倫理については、巷でも議論されることがあるが、彼らの発明と苦悩は、それを最も象徴する一例と言えるだろう。

そんなエンリコ・フェルミの名を冠した原発を訪れたのは 9 月 14 日のこと。ピエモンテ州都トリノ中央駅から電車を乗り継ぎ東へ一時間半ほどで原発の町トリノに到着した。今回は忘れずにガイガーカウンターを持ってきたので、さっそく放射線量を測定してみる。毎時 0.09 マイクロシーベルト。ちなみにローマは 0.24 マイクロシーベルト、ピエモンテ州都トリノは 0.14 マイクロシーベルトだった。もちろん簡易な測定器を使った正確性に欠ける数値ではあるが、イタリアは大都市になればなるほど、放射線量が高いという結果になった。つまり、停止された原発からどれだけ距離があるかということは、大気中の放射線量になんら関係はないようだ。



【ホテル“Il Convento”】

トリノに到着して、まずは荷物を置くために、この町唯一のホテル“Il Convento”に向かう。1500 年代の修道院を改修した趣のあるホテルで、広くてきれいな中庭があり、次の日曜日には結婚式で使われるらしい。ホテル内に飾られている写真や地図、配架されているパンフレットなどから察すると、トリノは野鳥観察や自転車でのツーリングで立ち寄る町のような。ホテルには、レストランガイド本の認定シールがドアにペタペタと貼られたレストランも併設されている。トリノ周辺はコメ栽培でも有名だ。ツーリングで訪れ、郷土料理に舌鼓を打つというのが、本来のトリノの楽しみ方のような。やはりまた場違いな所に来てしまったと思っていたら、そうでもなかった。チェックイン時にホテルの女将に、原発見学に来た旨を伝えると、「昨日までここに SOGIN の責任者が泊まってい

たのに」と教えてくれた。SOGIN と言えばイタリアの原発の管理を任されている会社ではないか。のんびりした小村の雰囲気とは裏腹に、原発に関わっている人間は確実に存在している。



【エンリコ・フェルミ原子力発電所】

それでも町の図書館で調べてみても、町の住人に聞き取り調査を行ってみても、通り一遍の情報以外は何もわからない。1960年から1964年にかけて工事が行われ、1965年に運転開始。チェルノブイリの事故を受け、1987年に運転を停止し、現在は2030年の原子炉解体を目指して作業が進められている。トリノの町は原発で一時的に活気づいたこともあったが、今はまたひっそりと静まり返っている。

翌日、ひっそりした小村から原発に徒歩で向かう。大型トラックがビュンビュン走行する国道の端をどうにかこうにか30分ほど歩いて原発にたどり着いた。きれいに整備された道路をごみ収集車が駆け抜けていく。ここでも線量を測定してみると、驚異の0.05マイクロシーベルトだった。このガイガーカウンターで測れる最低値だ。宿に帰ってそのことを細身で奥ゆかしい女将に話すと、ちょっとした原発談議に発展した。当時から原発による汚

染については十分な管理がなされてきたから、現在線量が低いのは当然のことだろう。チェルノブイリ後の国民投票で原発停止が決まったが、トリノでは原発と問題なく共存できていた。そしてサステナブルなエネルギーが見いだせないでいる現在のイタリアの状況を考えると、原発再開も念頭に入れるべきだとの意見だった。ホテルが歴史的建造物に指定されているため、屋根にソーラーパネルを設置することも禁止されていると愚痴をこぼしていた。

原発再開に賛成するイタリア人に会ったのは初めてではない。ローマにも同様の意見を持つ友人がいた。日本ではそもそもそのような議論を控えているからかもしれないが、彼らの意見を実際に聞くのは新鮮だった。特に北イタリアでは、チェルノブイリ原発事故の影響も大きかったと聞く。それでも日本とは原発に対して持っている印象が大きく異なるのだと、話していて感じた。これはやはり掘り下げる価値のあるテーマかもしれない。私は女将にお礼を言い、ホテルをチェックアウトして、エミリア＝ロマーニャ州にある原発の町カオルソに向かった。

(つづく)

(翻訳家、元当館語学受講生)

<オンラインレッスン随時受付中>

zoom を使用したマンツーマン(1対1)のオンラインレッスン。多くの方にご利用頂いています。



編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centero@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>